早稲田経済学研究　34号　1991年12月

Th. ヘルツカの『自由の地』とユートピア

中　山　智香子

概　要

ブタペスト生まれのユダヤ人テオドール・ヘルツカの『自由の地：ある社会の未来像』（ウィーン，1890年）は，過剰生産の制御と搾取の廃棄を目標とした西欧人が東アフリカ赤道付近の地で経済的平等と労働の自由な連帯を実現する物語である。自由原理をユートピア小説という形態で叙述した同書について，近代の諸「制度」に対抗するもう一つの「制度」とそれをめぐる問題を考察するのが本論文の目的である。

序

ユートピアは両義的である。「それは人間関係を道徳不要な状態にまで戻そうとする。その複雑な組織は機械装置のようである。～中略～人間から成る機械装置が太古の昔からの夢の象徴である無何有郷 Schlaraffenland を生産するのだ[1]。」ユートピアは自由と人間性の解放を標傍しながら，精緻な組織化，すなわち自由に対する束縛を必要とする。それは「どこでもない場所」でありながら，互いに似た夢が繰り返し描かれ，「どこにでもある場所」になっている。反現実であるユートピアを描くことは，よりよい現実への向上を志向し，現実を変革する力を持つとされている。

本論文では19世紀末ウィーンの生みだしたユートピア的社会構想，すなわちブダペスト生まれのユダヤ人テオドール・ヘルツカの手になる『自由の地：ある社会の未来像』を素材に，ユートピアをめぐる経済思想とその位置を考察する。同書は1890年にドイツ語で出版され，翌年に英語，数年後にフランス語に翻訳されるなど広く読まれた作品であり，著者はこれを国家小説 Staatsroman の伝統の下に位置づけている。しかし他方，著者がオーストリア学派の経済学者 C. メンガー等に学び，同書以外には通貨問題を主題とした多くの経済学的論考を残していること[2]，また同書の理論的継承関係について，彼自身が序文の中で，J. S. ミル，マルクス，ダーウィン等に負うとあえて述べていることなどを考慮するとき，この作品を単に小説というジャンルに分類してしまうのは，妥当でないことのように思われる。むしろこの作品をどのように位置づけるかという判断の中に問題が含まれるといってよい。

そこでまず，この作品がいかなる評価を受け

(1) Benjamin, W. "Paris, die Hauptstadt des XIX. Jahrhunderts", in *Gesammelte Schriften*, Band V・1. S. 47.

たかを概観してみることにする。略歴（註(2)）に見られる通り，著者ヘルツカはジャーナリズムの興隆した時代の要請に鋭く反応し，さまざまな新聞，雑誌を刊行，あるいは編集している。また経済学者の組織化にも興味があったようである[3]。しかし彼が評価されるのはもっぱら，先に述べた彼の代表作『自由の地』によってである。以下にその典型的なものを引用してみることにしよう。

「ヘルツカは普通の意味での社会主義者ではなく，社会民主党とも労働運動ともいかなる関係ももっていなかった。にもかかわらず彼のユートピアは，経済的自由主義と社会主義思想との優れた混合によって，この時代の意義ある資料であった[4]。」

この言明を記したD. H. コールは，ヘルツカの思想が結局はプチ・ブルジョワ的イデオロギーにすぎないと結論しているが，彼がヘルツカをオーストリアの社会主義思想の一つとして，わざわざ補足的な節を設けて説明を加えていること自体，ヘルツカの社会主義者としての評価を裏付けているといえるだろう。ヘルツカは，政党との関わりや実践的な労働運動との関わりといった「普通の意味」とは異なる意味で，すなわち「自由主義を否定しないユートピア的」な社会主義者であった。実際彼の思想はF. オッペンハイマーを通じて協同組合主義に生かされているという[5]。

ところで，ここでは『自由の地』がほとんど小説として評価されていないことに注意したい。それは国家小説 Staatsroman という著者の規定

(2) ヘルツカの略歴，代表的な作品は以下の通り。
1845：Pest に生まれる
1872～1849：新聞 Neue Freie Presse の経済部記者（通貨問題担当）
1874：経済学者協会 the Society of Austrian National Economists を設立
1875：*Die Valutafrage*（「通貨問題」）＜論文＞
1876：*Währung und Handel*（『通貨と取引』）
1877：*Die österreichische Währungsfrage*（『オーストリアの通貨問題』）
1879：*Die Goldrechnung in Österreich-Ungarn*（『オーストリア・ハンガリーの金計算』）
1879～1886：新聞 Wiener Allgemeine Zeitung 刊行，同紙編集
1880：*Die Gesetze Handels-und Sozialpolitik*（『貿易政策，社会政策の法則』）
1886：*Die Gesetze der Sozialentwicklung*（『社会発展の法則』）
1887：*Das Wesen des Geldes*（『貨幣の本質』）
1889：週刊誌 Zeitschrift für Staats-und Volkswirtschaft 刊行
1890：*Freiland：ein soziales Zukunftsbild*（『自由の地：ある社会の未来像』）
1891：*Ostafrikanaan*（『東アフリカのカナーン』）
1892：*Das internationle Währungsproblem und dessen Lösung*（『国際通貨問題とその解決』）
1893：*Eine Reise nach Freiland*（『自由の地への旅』）＜小説＞
1894：*Wechselkurs und Agio*（『交換相場と打歩』）
1895：*Entrückt in die Zukunft*（『未来へ帰り来とみれば』）＜小説＞
1897：*Probleme der menschlichen Wirtschaft*（『人間的経済の問題』）（Bd. 1, Das Problem der Gütererzeugung（『財生産の問題』第一巻））
Freiland 第十版
1901：ハンガリーで日刊新聞の編集。
1912：*Östrreich-Ungarn Streitfragen*（『オーストリア・ハンガリーの抗争問題』）
Das soziale Problem（『社会問題』）
1924：Wiesbaden にて没。
また彼は若い頃ドイツ経済者会議，ドイツ・マンチェスター学派とも関わりを持ち，同派の機関誌上 Vierteljahrschrift für Volkswirtschaft, Politik und Kulturgeschichte にリカード，ロードベルトゥスに関する論文を発表している（参考文献[2]，[3]）。
(3) 彼は1874年に経済学者協会 the Society of Austrian Natinal Economists（独語名未確認）を設立している。
(4) [7] p. 559.
(5) [13] p. 361.

とは無関係に，むしろ経済学的論考と受け取られている。ここに，経済的・社会的構想，ユートピア，小説というジャンル，この三者の関係の単純でないことが明らかである。実際，ヘルツカ自身もまた「ユートピア小説」というものに対して，両義的な感情をもっていたことが知られている(6)。彼がこの作品を書いたのは，単にハンガリー的気質であるというデーリバーブ délibáb（夢想能力）による(7)のではないだろう。それでは何が彼にこのような構想を描かせたのか，また経済学者がこのような作品を書くということが，著者にとって，あるいは歴史的に，いかなる意義をもっていた，あるいはもっているのか。これらの問題に対し，ユートピアをめぐって解決を試みるのが本論文の課題である。

第一章　『自由の地』：「自由」の内容

そこでまず，ヘルツカによる経済的・社会的構想のユートピアがどのような内容を持っていたのか，すなわち彼の主張する「自由」とはいかなる内容だったのかについて，物語のあらすじ，「自由の地」の組織，「自由の地」の生活，経済システム，社会という五つの側面から概説してみることにする。

＜物語のあらすじ＞

全体は四部から成り，物語はヨーロッパ，アメリカの主要な雑誌に掲載されたという「国際自由協会」結成の呼びかけから始まる。呼びかけ人はカール・シュトラールという名の人物であり，呼びかけはまるで本当にあったことであるかのように，発信地がオランダの都市ハーグ，発信日が7月18日となっている。呼びかけ文は，完全な自由と経済的正義に基づくコミュニティの設立の意志と，コミュニティにおける諸原則の簡単な説明，さらに設立に向けての会議の日程の案内を含んでいる。

第一部は，この設立に向けての会議の後に結成された先発部隊が，東アフリカ赤道付近の山地（ケニア周辺）に到着し，その地を「自由の地」と名付けて植民の準備を始めるまでの五年間を，呼びかけ人シュトラールの友人であるネイという名の人物による航海日誌から，という形で記述している。記述によれば，現地人とは多少の衝突を除いて和解，その後彼らに対しても，「自由の地」の制度に向けての啓蒙が行われたと記されている。第二部は最も重要な部分であり，「自由の地」の経済的，社会的諸原則が生活中のさまざまなエピソードと共に述べられている。第三部は，対アビシニア外交を展開するために父と二人で「自由の地」を訪ねたイタリア王子カルロ・ファリエリが，友人に宛てて手紙を書いたという形式をとり，王子と「自由の地」当局者との間に交わされた対話を，王子が手紙の中で紹介するという形で，自由の地のさまざまな制度や生活を具体的に示している。王子が「自由の地」に対して抱く疑問は読者の疑問を代弁し，これが文中で答えられることによって読者を納得させるという仕組みになっている。結局第三部の終わりには，王子は全ての

(6)「私が，この本は数多くのユートピア小説の一つに位置づけられるかもしれないという恐れから，ここで採用した形式に少なからぬ気のとがめを憶えたことを認めよう。～中略～しかし私は，モア，フーリエ，カベー等，自らの願いがしっかりした現実であるかのように描いた人々と同じカテゴリーに位置づけられることに満足しなければならない。」（[1]S. 354）という結論部分の一節は，ユートピア小説に対する彼の両義的な感情を明らかにしている。この点については第二章で詳述する。

(7) [13] p.362.

点で「自由の地」の制度に共感し，また呼びかけ人シュトラールの友人ネイの娘に愛情を抱くようになって，彼女と結婚し「自由の地」住民になることを決意する。第四部は，対アビシニア戦に勝利した「自由の地」に対して欧米諸国など世界中が関心を持ち始めたことが述べられた後に，「自由の地」の原理をめぐって開催されたという（世界68ヶ国から成る）国際会議の議事録が記されている[8]。この討論もまた，「自由の地」の制度を読者に向かって正当化するべく機能している。討論の終わり近くには，アメリカ，ロシア人の代表者が「自由の地」体制への移行を表明し，最後に議長（当初の呼びかけ人）シュトラールが再び「自由の地」の理想を唱えて会議が閉会され，これと共に物語も終わりとなる。

＜「自由の地」の組織＞

「自由の地」当局の組織構成は以下の通りである。

1．総長 Das Präsidium
2．福祉 Versorgungswesen
3．教育
4．芸術と科学 Kunst und Wissenschaft
5．統計局
6．道路とコミュニケーション手段
7．郵便（電信を含む）
8．海外事情
9．倉庫あるいは市場 Lagerhaus
10．中央銀行
11．公共事業
12．衛生と司法 Sanitätswesen und Justiz

＜「自由の地」の生活＞

4：00	起床，湖で入浴，食事
5：00～10：00	労働
10：00～	休憩（二度目の入浴），余暇（読書，会話，ゲーム）
1：00	昼食，第二の余暇（三度目の入浴も）
4：00～6：00	労働（収穫期は～8：00）
7：00	夕食
～	音楽（楽器演奏，コンサートなど）

週約40時間労働で，日曜にはハイキング，狩り，コンサート，講演などが催される。アルコール以外の楽しみごとについては規制がない。ただしアルコールについても，飲んで忘れるべき悩みがないので，過度の飲酒に耽る者はいないとされている。また犯罪の元凶である搾取システムが存在しないので，犯罪は起こらないという。このため警察は存在せず，さらに軍隊，病院（サナトリウム的な療養所を除く）もまた存在しない。

(8) 議題は以下の五つである。
1．なぜ「自由の地」以前に，経済的正義と自由の原則に基づく共同体がなかったのか。
2．「自由の地」の成功は，偶然的，一時的好条件に帰せられるべきではないか。それともこれらの制度は，人間の中に普遍的かつ内在的にあるものなのか。
3．欠乏と悲惨さは生存の必要条件ではないのか。この世から悲惨さがなくなると，過剰人口がそれに続くのではないか。
4．相続権や特権なしに，経済的正義の制度をあらゆる場所で導入することは可能なのか。もし可能なら，いかなる手段でそれを行うことが最もよいのか。
5．経済的正義と自由は人間進化の究極的目的なのか。またそのような体制の下では，何が人類の条件となるのか。
ただし，これらの問に対して必ずしも説得力のある答えが述べられているわけではない。

＜経済システム＞

基本的には肥沃な土地に依存している。準備の時期にはまず製粉機，刈り取り機，脱穀機などが生産されて農業の自立的基盤が固められ，次に水力を用いた機械工業の設置によって，ヨーロッパ諸国から経済的に独立する事が可能になった。植民した土地は，鉄と石炭にも恵まれており，住民は鉄製品を生産して，これを現地人と週一回，物々交換をすることによって，牛，野菜，象牙などを得る。象牙は当初，貨幣の役割を果たしたが，植民25年目には金脈が発見され，これを用いて独自の貨幣（自由の地ポンド）が鋳造されるようになった。但し貨幣は海外との取引と価値基準とに用いられるにすぎず，計算単位としては各人の労働時間が尺度とされる。したがって貨幣市場は存在せず，貨幣そのものへの需要もない。準備期間にはさらに，道路，井戸，輸送サービスなどの社会資本も形成される。

経済システムに関して注目すべきことの一つは，経済活動における自由原理の完全な作動である。このために全ての障害が取り除かれたとされ，特に「労働の完全に自由な移動」と，「情報や知識，価格などの完全な公開性」とが保持されたと強調される。このような条件の下ではセイ法則が完全に機能し，過剰生産は起こらない。生産における完全な公開性を保つため，全ての生産手段は共有され，「自由の地」住民は全員，これに対して自由な使用権を持つとされる。資本の貸付は無利子であり，賃貸料に各人の労働時間を単位に，帳簿上の操作によって支払われる。このようなシステムを支えるのは，精緻な簿記のシステム，発達した信用制度の存在，そして信頼できる中央銀行の存在である。一方，市場空間も整備され，組織化されており，大ホールや倉庫，バザールなどが市場空間として用いられている。価格は需給法則によって，生産費を最低水準，商品の最も高い効用を最高水準とした幅の間で決定されるとされている（ちなみにこれはボェーム・バヴェルクらオーストリア学派の価格理論を踏襲したものである）。

労働時間は，計算単位とされているが，労働組織には分業的協力のメリットが生かされ，労働組織とは完全に自由かつ自主コントロール的な労働者の連帯組織であると定義されている。「自由の地」の労働者は，雇用者ではなく自分達こそが労働を真に支配しているのだという信念に支えられている。ここでは現存の社会に蔓延する搾取システムが廃棄されている。頭脳労働者と手工業者の差別もない。ただし女性，児童，老人，障害者など働けない者は全て，福祉によって保護されている。こうした福祉費用の他，教育費，コミュニケーション費（情報費），公共事業費，投資のための準備金などは，一般支出と呼ばれるものの一部として支出されるが，この一般支出は租税によってまかなわれ，常に国民総生産の30％以上を占めるとされている。

技術進歩に対しては，限りない信頼が寄せられ，家事労働は全て機械によって行われるという。「鋼鉄と鉄とでできた従順な創造物は疲弊することなく，文句もいわず，使ってくれということ以外，人間に何も頼まずに働いてくれる[9]。」などの記述は，ほとんど機械の摩耗を

(9) [1]S. 178.

無視するまでの機械信仰を明らかにしている。

＜社会＞

「自由の地」の特質は，ある特定の領土の支配ではなく，その社会制度にあると述べられていることからもわかる通り，個々の社会制度について細かい記述がある。全ての根底にあるのは資本主義社会に対する批判の意識である。先にも触れたように，現存の社会は「搾取社会」と定義され，富の神 Mammon に取り憑かれた社会であると述べられている。ただし搾取システムはやがて自らの過剰生産の重みで機能できなくなる運命にあるので，資本主義社会は平等に向けての前段階の社会であるとされている。こうした見方，また「能力に応じて働き，必要に応じて分配される」という原則を遵守した社会構造などには，明らかにマルクスの影響が見られる。ただし共産主義に対しては，その理想とされている絶対的平等に対して，「平等を欲する余りに生じる幻覚以外の何物でもない[10]」という批判，また「大多数の人間の悲惨な状態が，現存する個人の富の力によってのみ除去され得ると信じている[11]」などの批判が行われている。さらにニヒリズムもまた，「文化や文明が，権利の平等と両立し得ないという教義による絶望から出てきたものにすぎない[12]」として否定される。またキリスト教との違いについては，キリスト教が貧困に基づく平等をめざすのに対して，「自由の地」は富に基づく平等をめざすのだと述べられている。

「自由の地」のスローガンは幸福と尊厳であり，これを尊重できる社会，すなわち各人が完全に独立し，自由に自らの仕事＝作品 Werk を生産することのできるような社会を建設することである。このために，進歩を促進する二つの歯車，芸術と科学の力によって，豊かさと余暇とをめざしている。そこでまず，芸術，特に建築と音楽とが重視される。これらが特に重視されるのは，前者は美しい自然の景色に対応して形作られるべきものであり，後者は芸術の最も基本的な形態とされているからである。グランド・オペラ，演劇的オペラ，劇場，コンサート・ホール，学問的講義のためのホールなどは豊富に建造されている。また読書が重視され，読書量，情報量は欧米なみであるということも強調される。図書館も整備され，「アゴラ」（古代ギリシアの広場）のようにサロンの役割をも果たすとされている。ところでこのアゴラという言葉を含め，古代ギリシア・ローマを理想社会として想定していることは，いくつかの箇所から明らかである[13]。さらに，自然に対する敬意から環境問題にも配慮がなされており，工場や各種の建物は空気，水を汚染することなく建設されたと述べられている。これは今日的な観点から興味深い。

教育に関する叙述には多くの紙面が割かれている。幼児教育の責任は母親に帰せられ，初等教育に関しては性別，将来の職業に関係なく，全ての子供が享受する権利を持つ。基本的教育の具体的な内容は以下の通りである。

(10) ebd. S. 232.
(11) ebd.
(12) ebd. S. 233.
(13) 「ローマのダヴィデは，ヨーロッパの服装がアフリカの野生のそれと同じようなものであったことを連想させる。」（ebd. S. 176.）など。ヘルツカは欧米人の服装がエキセントリックであると批判している。

4～6歳：幼稚園，遊びを通じた教育。

6～10歳：小学校，体育と水泳以外は女性が教育。

10～16歳：中学校，男女別。ここまでの段階で，文法，文学史，一般史，文明史，物理，博物史，地理学，幾何学，体育（体操，ランニング，ダンス，水泳，乗馬）が教えられる。身体の鍛錬のため精神労働は一日六時間以内とされる。子供の自発性を重視する。

16～22歳：男子は職業教育（工業，商業的専門学校）

女子は家事手伝い，もしくは美的訓練

優秀者は，男女問わず高等教育（大学）への進学が可能である。いずれの場合にも，なお身体教育が重視されており，ギリシアのオリンピックになぞらえた年一回の運動会に，全員が参加する。（ここでもギリシアは理想像である）。

ところで，教育の場面に限らず，身体の鍛錬は「自由の地」のスローガンである。そこには「身体運動能力が優れていてこそ，自由の地の住民は侵されることのない平和を享受できる[14]」，あるいは「国民の身体の健康は，その国の軍事的強度の基礎である[15]」といった信念がある。「自由の地」は軍隊をもたないが，身体の鍛錬，スポーツが軍隊的な訓練の代用物として機能しているのである。また教育に関しては成人教育の充実していることが，今日的観点から注目される。

先ほど初等教育が女性によって行われることに言及したが，女性に関する叙述全般も興味深い。J. S. ミル，イプセン，ストリンドベリ等，女性の地位の平等を唱える同時代の思想への目配りからか，「自由の地」の能力ある女性は，男性と同じく知的労働に携わることができるとされているのである。しかしそれ以外の女性は教育，もしくは美の開発に関わる職業につくか，育児，看護に従事するのがよいとされている。「女性は生計を立てる機械の歯車ではなく，人間性の核心部分における宝石でなければならない[16]」という言明が，ヘルツカの女性観を表すといえるだろう。ここでは売春はもちろん，生計を得るための結婚もまた批判的にとらえられ，愛によって結びついた一夫一婦制だけが肯定されている。これが個人の自由の束縛になるのではないかという疑問に対しては，何人もの異性を欲するのは抑圧的な搾取システムの悪影響であると答えられており，このシステムを除去すれば無放縦な欲望は起こらなくなると述べられている。

最後に社会の進化については，社会ダーウィニズムと社会有機体説的な調和論との混合したような信念が述べられている。すなわち，人類は原初以来，進化という普遍法則に従ってきたが，同種間で闘争の行われたことは稀であったこと，人類は空腹を原動力に進化してきたのではなく，空腹にも関わらず気高い精神を持って進化してきたということ，また人口抑制は自然

(14) ebd. S. 192.
(15) [1]英訳 p. 428.
(16) [1]S. 115.

淘汰に任せれば，人類の叡知によって自ずとうまく行われるということなどが，「自由の地」住民によって述べられている。究極的な社会については，J. S. ミルと同じく定常状態を肯定的にとらえており，これを完全な均衡社会と想定している。

以上が「自由主義を否定しないユートピア的社会主義社会」という評価を受けているヘルツカの『自由の地』の概略である。これらのもつ意味について，以下に検討を進めていくことにしよう。

第二章　ユートピアと実験室

第一章で見たとおりヘルツカの作品『自由の地』は，小説として読まれた場合には，イタリア王子が「自由の地」住民となったり，アメリカ，ロシアの両国が「自由の地」体制に移行したり，と確かに非現実的な説話となっているが，その経済的・社会的構想は必ずしも突飛なものではないといえる。そこで同書のユートピア性を考察してくることにする。手がかりになるのは，ヘルツカがユートピア小説という形式を採るに至った経緯について告白した結論の一節である。

「当初私が，この本は多くのユートピア小説の一つに位置づけられてしまうかもしれないという恐れから，ここで採用した形式に少なからぬ気のとがめを憶えたことを認めよう。しかし私はよく考えた後，多くのドライな抽象よりも，できる限り生き生きとした像を提示しよう，抽象的観念ではぼんやりとした輪郭しか示せないものを，この形式（ユートピア小説）によってはっきりと具体的に示そう，と決心したのである。私は，モア，フーリエ，カベ―等，自らの願いがしっかりした現実であるかのように描いた人々と同じカテゴリーに位置づけられることに満足しなければならない[17]。」

ここから第一に，彼が叙述において抽象的観念，抽象的叙述への不信感を抱いていたことがわかるだろう。おそらくそれは，純粋理論への不信感とも言い換えられる。ちょうど彼の理論的出自であるオーストリア学派が主観価値論を展開する際に数学的叙述形式を採らず，例えばメンガーが価値論を展開する場合に最も単純な場合の例えとして「周囲から隔絶された孤島における財の需要[18]」や「航海中の船の中での欲求[19]」を叙述したように，ヘルツカはこのような形式を拡張したものとして物語叙述を進めたといえる。彼は初期にリカードにほとんど賛意を示すばかりの研究論文を発表し[20]，また『自由の地』を発表する数年前に彼の経済原論というべき著作を著す[21]など，必ずしも抽象的観念，叙述に理解を示さなかったとはいえないが，少なくともこの作品では，原論で主張した「自由原理の完全な作動」の状態やその前提をより具体的に分かりやすく説明することを求めたのだろう。すると物語中で「自由の地」の植民25年

(17) [1]S. 354.
(18) [17]S. 100.
(19) ebd.
(20) シュモラーはヘルツカをリカードのエピゴーネンと規定している（[20]S. 260.）
(21) *Die Gesetze der sozialen Entwicklung*, Leipzig, 1896.

後に金脈が発見されたり，技術進歩が思うままに進んだりする楽観的，ユートピア的な筋書きもまた，理論における前提，仮定と軸を一つにするものであることがわかる。

また彼が他方で，抽象的，理論的叙述よりも「生き生きとして」楽しみやすく，わかりやすいはずだと考えられるジャンルとして，小説を認識していることが明らかである。物語中，イタリア王子が「自由の地」住民となったり，アメリカ，ロシアの両国が「自由の地」体制に移行したり，といった非現実的な説話の要素や，日誌や手紙，議事録といったさまざまな形式をとる作品の構成要素などの虚構性には，読者を飽きさせまいとする著者の努力が表れている。そして彼の意図は実際，かなり十分に受けとめられたといえるだろう。同書は何ヶ国語にも翻訳され，ドイツ語版は十年足らずの間に十版までも版を重ねるなど，広く一般に読まれたからである。ところでこうした小説あるいは芸術一般と科学とを二項対立的にとらえる視点は，同時代の芸術一般に対する信仰（それは彼の「自由の地」にも共通していえることである。第一章の＜社会＞の節を参照されたい），また文学，特に小説というジャンルの興隆と関連させて考えなければならない。

しかしより重要なのは，ユートピア的な経済的・社会的構想の実現に対する彼の考え方である。通説的なユートピア研究においては，モア等の「古典的ユートピア」と近代的（18～19世紀）ユートピアとが区別され，後者は著者自らもまた一構成員である社会の抱えている「社会問題」を指摘してその社会制度を批判し，これに対して改良案を示す立場をとるのが特質であるとされるため[22]，ヘルツカはカベー，E. ベラミ，W. モリス等とのみ，並列的に論じられるのが普通である。しかしヘルツカ自身はとりあえずむしろ大ざっぱに，「願い」を作品に託したモア，フーリエ，カベー等の作品と自らの作品が同じ系列に位置づけられることを認めた上で[23]，あくまでもそれは「満足しなければならない」ことであって，必ずしも彼の本意ではないとしているのである。彼は他の書物の中で『自由の地』の目標について，第一に過剰生産を抑制すること，第二に人間による人間の搾取を廃棄して，誰もが労働手段を調達できるようにすることであると述べている[24]。彼は，過剰生産とその元凶である「搾取システム」を批判し，それが原因で生じた社会問題，都市問題を解決するために，これに代わる「具体的な」理想像を描くことが必要だと考えた。しかし彼にとっては「自らの願い」を「しっかりした現実であるかのように描く」だけでは不十分であり，この願いが実際に実現するような構想を描くのでなければならなかったのだ。別の箇所でも「しっかりとした現実に応じている点でこの作品は従来の国家小説 Staatsroman とは異なっている[25]」として，この作品の現実性について自信を見せ，先駆者との違いをきわだたせている。彼にとって「自由の地」は，決して絵空事にとどまるものではなかったのである。人間と人間

(22) [10]，[11]，[16]など。
(23) また『自由の地』序文では，彼は F. ベーコンの構想を賞賛している。
(24) [4] S. 8.
(25) S. XIV.

らしい生活に関するユートピアは実現されるべき未来であった。

大まかに述べれば，このような実現をめざすユートピアは，19世紀における自然科学体系の成立と関連させて考えることができるだろう。それは社会科学の領域にも波及して方法論争をはじめとする論争を引き起こしたばかりでなく，文学の領域にも影響を及ぼした。「実験室[26]」という言葉に象徴されるような自然科学の方法は，一定の条件を揃えさえすれば，誰の手によっても一定の結果を得られるはずだという，ある意味で「民主的」な結論をもつものであり，ヘルツカもまた彼の経済的・社会的構想をある種の「実験室」として，すなわち条件さえ揃えれば実現するはずの構想として描くことによって，その方法的意識を時代から敏感に感じとっていたのである。

しかし彼の意図とは異なり，実現をめざすユートピアは結局実現されえなかった。同書の出版後，実際に「自由の地協会」が設立され[27]，ケニア付近に「自由の地」を建設しようとする試みがいくつか行われたのだが，その顛末は実現化の頓挫であった。比較的ていねいにこれを扱った一節を引用してみよう。

「自由の地構想は1890年代に，一種のブームを呼び，ヨーロッパ各地で自由の地協会が誕生した。1893年には，オーストラリア人ウィリアム・レインがパラグアイに労働組合員の自由の地コミュニティを作ったが，絶対禁酒の問題から挫折した。絶対禁酒主義者のレインは，禁酒の誓いを破ったメンバーに退去を強いたのである。一年後，今度はケニアで，ユーリウス・ヴィルヘルムによって小規模なコロニーが試みられたが，やはり失敗に終わった[28]。」

「自由の地」は結局，実現されても長続きしなかった。それは上記に述べられたように当事者間の問題であったかもしれず，また何かその他の障害によるものであったかもしれないが，より根本的にヘルツカの構想自体も問題を含んでいたことを指摘しなければならない。それが実現化の段階で現実問題として明らかになったともいえるだろう。

第一にヘルツカの空間認識の欠如が問題である。彼は「自由の地」を東アフリカ赤道付近の一帯と設定したことについて，現実的であるととらえているが，実はアフリカは未だ所有権の入り込まない土地，すなわち誰のものでもなく，誰かが自由に利用できる土地として想定されているのである。『自由の地』の執筆された時代，アフリカはすでに植民地争奪戦の場となり始めており，帝国主義が推し進められ始めていた[29]ことを考慮すると，ヘルツカがそれに気づかなかったのはむしろ奇妙だという評価[30]が妥当に思われる。また「自由の地」の植民中，原住民との衝突があまりなかったという記述の小説的ユートピア性，あるいは理論的仮定としての

(26) [21]の中のボードレールについて述べられた一節「彼は自らのアイデンティティを喪失して一個の没個性的な観察者と化し，事物を『客観的に』生き生きと見る，まるで実験室の科学者のように。～中略～ところで実験室とは19世紀が生んだ人工楽園であった。」という言葉に負う。ここで実験室が「人工楽園」と規定されているのは興味深い。

(27) "Freiland, Organ der Freilandvereine", Wien Ⅷ, Lange Gasse 53. ([4]S. 4)

(28) [13]p. 362.

(29) [9], [14], [18]など。ただし[14]はマンチェスター学派の非帝国主義的側面をとらえている。

(30) [7]pp.. 564～565.

ユートピア性も，このような空間認識の欠如と関連させた場合，問題となるだろう。しかし一方，「自由の地」住民の共通言語が英語とされていること，また金脈を見つけて「自由の地」独自の貨幣「自由の地ポンド」を鋳造するまでに用いられていた貨幣が英国ポンドであったことなどを考えるとき，同書の細部に大英帝国拡張のイメージが投影されていると言えないこともない。少なくとも同書が英国圏で評価されたときには，読者はこうした細部に満足し，同書を身近な冒険譚として読んだことだろう。さらにヘルツカが初期の論文[31]で，利己心の発現は必ずしも競争状態にいたらず，独占に至る場合もあるという考えを取り上げ，それはイギリスの対外貿易を指しているのだと述べていることは，彼がイギリスの帝国主義的政策に意識的であったことを裏付けるものといえるだろう。おそらく彼は，アフリカという具体的な空間をそれと認識しつつ，なお無記名の土地に最もふさわしい空間として，「自由の地」の舞台をアフリカに決めたのである。そしてこのような矛盾は実現化の段階で必然的に露呈する。

次に「自由の地」の人間性に関する規定に問題がある。第一章で見た通り，そのスローガンは幸福と尊厳であり，これを尊重できる社会，すなわち各人が完全に独立し，自由に自らの仕事＝作品 Werk を生産することのできるような社会を建設することが「自由の地」の人々の目標となっている。彼らは皆，労働を尊重し，自らの能力に応じて働いている。男女は愛によって結びつき，一夫一婦制が遵守される。正直さが美徳として尊重される。これらは確かに多くの人々によって容易に認められる理想的，ユートピア的な人間像であろう。しかし現存の資本主義の「搾取システム」が廃棄されればこれらの人間性が「回復」されるのかどうか，またこれらが果たして人間性の自然なのかどうかは，ヘルツカが信じていたほどに自明ではないだろう。彼は，テンニースの用語に従うならばゲマインシャフト的，ハプスブルグ帝国に応じた用語を用いるならばビーダーマイヤー的なものへの郷愁を抱いていたといえる。彼が作中で，しばしばビーダーマイヤー的特質とされるノンシャランス nonchalance を，「自由の地」住民の特質として述べている[32]ことは，これを確証するものである。この一語は，自由主義体制を認めながら新社会が達成できると考えるヘルツカの楽観的な見通しと相通じることはあっても，彼の理想とした人間性とはおよそ調和しない性質である。彼の理想とした人間性はむしろ禁欲をもって遵守する類のものである。パラグアイのコミュニティの禁酒問題による挫折は，おそ

(31) ［2］

(32) ヘルツカは作中で，「自由の地」を視察し，公共事業に関する採決に立ち会ったイタリア王に「結局私に信じ難いのは，ほとんどノンシャランというべき軽率さで，重大なことを決めてしまうことだ。しかもそれで多くの人々が十分満足しているような印象を受ける」と語らせ，「自由の地」住民に「その印象は正しいものだ」と答えさせて，住民間の連帯感を述べさせている（［1］S. 214）。

(33) 地上の楽園 earthly paradise と言う概念は M. エリアーデに負う。彼はアメリカ合衆国の建設を地上の楽園建設と規定し，ユートピアとパラダイスの関連を具体的に分析している（［8］）。古代ギリシア・ローマのアレゴリーである自由の女神をいだき，「自由の地」と同じように古代ギリシア・ローマを理想として，地上の楽園を志向したアメリカ合衆国と「自由の地」との対照性がここに想起される。エリアーデが「都市化や工業化が必ずしも（ヨーロッパにおけるように）悪徳，貧困，社会慣習の解体を意味しないことを証明するべく，（アメリカの）工場の所有者は協会，学校，病院を建てるなどといった博愛的活動を増加させた」（［8］）と分析するときの「工場の所有者」の心性を，ヘルツカもまた確かに共有していたのだろうが，彼は決してそれを実行する力を持たず，ただ構想を描くだけの書き手にすぎなかったのである。

らくこの点と関わりをもっている。

以上のような内在的な欠陥も相俟って，結局『自由の地』は社会改良を標榜しながらも，地上の楽園[33]探しに終わってしまった。作品中では当初エデン（楽園）と名付けられた谷間がその後「自由の地」と命名され，文字通り「自由」の「地」になっていくのだが，ヘルツカの構想はあくまでも，地上のどこかにエデン（楽園）を見つけられるという，資本主義からの駆け込み寺的な逃避の夢にとどまってしまったのである。当時，シオニズム運動の提唱者 Th. ヘルツルは，自らの社会構想を描いた著作の序文でヘルツカの『自由の地』に言及し，

「この書（ヘルツカの『自由の地』）は，この夢の国家が位置している赤道山地そのもののように現実の生活からかけ離れている。「自由の地」とは，互いに組み合わされる歯と歯車とを具えた複雑な機械装置なのである。しかし，それが作動可能であることを証明してくれるものは何もない[34]。」

として，すでにその非現実性を見抜いている。彼がこのような指摘の必要性を感じたのは，（両者の名前がよく似ており，両者が友人関係にあり，また両者ともにユダヤ人であったという事実は割り引くとしても），当時ヘルツカの経済的・社会的構想が非常によく知られており，また影響力をもっていたからであろうと推察できるが，ヘルツルのように社会改革を現実的に考える立場から見れば，ヘルツカのユートピアはまさに本論文冒頭に述べたユートピアの両義性に取り込まれており，「現実的だとして叙述される未来のディテールこそ夢物語の特徴だ」と非謗される類のものであった。

以上のようにヘルツカのユートピアは，当時の社会を批判する力も，現実を変革するだけの力も持たなかった。もし，ユートピアが反現実として存在しながらよりよい現実への向上を志向し，現実を変革する力を持つと期待されるものならば，彼の構想はユートピアですらあり得なかったことになる。そこではユートピアは現実から逃避するための場所ではないからである。しかしそのような短所を加味しても，多くの論者が指摘する通り，ヘルツカの『自由の地』が興味深いものであることに変わりはない。この点について以下に論じていくことにする。

第三章　「制度」と自己プロデュース

ここでヘルツカの『自由の地』を物的 materialistisch に解釈する。それは先に実現化への内在的な障害について述べたような意味でのテキスト内在的な解釈と異なり，その書の提示された空間における位置を確定することを試みるものである。この見方によれば同書は，著者の生きた時代にぼんやりと共有されていた（反現実としての）理想状態のイメージであるユートピアを精緻化しようとした典型的なあり方を示している。

そこでヘルツカとその作品は「制度」のネガ

(34)　[12]邦訳３ページ。

(35)　この用語の用法は蓮實重彦に負う。ここに述べられた定義は，例えば「語りつつある主体を確認する疑似主体にまやかしの主体の座を提供し，その同じ身ぶりによってそれと悟られぬままに客体化してしまう説話論的な装置に他ならない。それは，存在はしないが機能する不可視の装置なのである」（『物語批判序説』中央公論社，1985年，70ページ）などである。

像であるもう一つの「制度」として機能したのだ，という表現を採ってみたい。この「制度」という用語は，もともとは19世紀のフランス文学を考える際のキイ概念として用いられたものだが[35]，近代化とそれに対応した思想の流れという，空間的・時間的に制約を緩めた問題意識にとっても適切な概念であると思われるので，ここに採用する。さて，この場合の「制度」とは，経済学の制度化といわれるときのように大学システムや社会システム，講座や教授の配置といった教育システム等だけを指すのではない[36]。また法律制度というときの規制という意味よりも広い広義である。これらを含め，T. クーンのいうパラダイムの概念[37]に近いものといえるだろう。「制度」もまたパラダイムと同じように，解決すべき独自の「問題」をもっており，とりあえず方法的に自己完結している。しかしパラダイム概念が主に学問的な場面で，専門家集団に関してのみ用いられているのに対し，「制度」はより大きな空間的・時間的（時代的）広がりをもって用いられる。すなわち「制度」とは，それに則るとき，いかなる主体でもその「問題」について思考し，これを他者に向かって流通させ，他者を啓蒙できるような装置である。本論文に即して分かりやすくいえば，ヘルツカの経済的・社会的構想は紛れもなく彼の創作であるが，彼にそれが正論であると信じさせ，彼にそれを描かせた力は彼の背後から働いており，ここではそれを諸「制度」の力として理解したいということである。彼は，彼の生きた時代が不正とするものを迷わず不正とし，時代が夢見るものを夢見ていた。ところでこの力を敢えてイデオロギーと呼ばないのは，彼の構想が奇妙に今日でも通用すると思われるからであり，言い換えれば，イデオロギー的には推移した今日でも同じような諸「制度」の力が働いていると思われるからである。

さて，「制度」は個々の主体の口を通じて流通し，普及する。そこでこれを流通させる主体は，とりあえず自分がそれを語っているのだと信じることができ，またそれが自分の「問題」だと考えることができる。ヘルツカのように，当時の通貨問題委員会に呼ばれるなど時事問題の側面から経済学的な仕事に携わった場合は特に，その社会のもつ「問題」について考え，それを普及させることが自らの使命であると考えるようになる。前章で見たように彼が叙述の面において啓蒙への強い意志を示しているのは，このことと対応しているといえるだろう。しかし彼の使命は自分自身のために作り出した虚構にすぎず，これを維持するために彼は自分で自分を持続的にそれとして生かす，すなわち「プロデュースする」ことが必要になってくる。彼は「制度」が自分の口を借りて語っているのだと気づかないように，自分を信じさせなければならないのである。ここで『自由の地』をめぐって彼がいかに「自己プロデュース」を行ったかを少し具体的に追ってみよう。

1891年，すなわち『自由の地』出版の翌年，彼は『ヘルツカ博士による東アフリカのカナー

(36) 佐和隆光『経済学とは何だろうか』（岩波新書，1982年）の中で述べられた，シカゴ大学における経済学の制度化，あるいは杉山忠平他による「経済学の制度化研究」の国際的プロジェクトの成果を記した，明治期の日本の大学制度の研究 *Enlightenment and Beyond*：Political economy comes to Japan, Tokyo, 1988· において用いられた「制度化」の用法などを指す。

(37) Kuhn, T. S. The Structure of Scientific Revolutions, Chicago, 1962.（『科学革命の構造』中山茂訳　みすず書房，1971年）

ン』を匿名で著し，その副題を『「賢者」を鏡として反映させた，自由の地のシュトラールの省察』としている。表紙に記されているのは「賢者もまた動揺する。テオドール・ヘルツカ」という奇妙な引用句である。同書は数十頁しかない廉価な小型本（今日の文庫本サイズに相当）であり，著者ヘルツカは第三者として自分の作品『自由の地』を解説し，またヘルツカ＝シュトラールである人物を擁護している。いささか怪しげなのは，同書の中でヘルツカ＝シュトラールを神の使者モーゼになぞらえ，「予言者」と規定していることであるが，彼はシュトラール（ドイツ語で光線という意味）という名が，病気を治せるのは医者だけだということを想起させるものであり，社会の悪弊もまたシュトラール＝ヘルツカによってのみ治癒されることをヘルツカ博士が暗に示したのだと述べている[38]。また1893年には『自由の地への旅』という小型本を著し，ここでもまた「自由の地」を解説，擁護し，また「自由の地」の制度を正当化している。さらに1895年には『未来へ帰り来てみれば』と題する小説を著し，「自由の地」の制度が実現された夢物語を描いている。これらは全て，彼がヘルツカという人物を「自由の地」構想者として定着させようとして自己プロデュースを行った仕掛けである。それが，アカデミズム（マンダリン）的権力の枠内で自己規定を行うことのできなかった自称経済学者のアイデンティティを得るための苦闘だったのか，人間としてのアイデンティティを求める同化ユダヤ人の苦闘だったのかを，ここで判断することはできないが，そのいずれでなくとも，「制度」によって語らされる主体が自己の存在理由を求めて上記のような自己プロデュースをせざるを得ないというところが重要である。

このような立場からもう一度ヘルツカの生涯を見直してみるとき，彼がほぼ全生涯にわたって追求したのは，常に諸「制度」に沿って思考することだったのではないかと思われてくる。上記に明らかにした「自由の地」をめぐる数年を除いて，彼の明け暮れた新聞，雑誌の刊行や編集もまた，新聞や雑誌がまさにここでいう意味での「制度」を背負い，肯定することにせよ否定することにせよ広く「問題」を流通させる民主的メディアであることを考慮するならば，「制度」的機能の一環として自然に理解されるだろう。彼はひたすら，人々の間にぼんやりと共有されているイメージを問題として，あるいはその解決策として具体的に記すことに努め，またそれで個々の主体は語るべきものを持ち得ると信じる人生を送ったのである。

ところで，いま述べた「人々の間にぼんやりと共有されているイメージ」とは何を指すのか。それは近代のユートピアがいずれも同じように描き出した通り，善悪，美醜，是非など人間性の全般に関して緩やかな体系をなしている評価の集合体である。またそれは近代化しつつある都市という現実をポジ（肯定的という意味は含まない）としたときのネガ像であるともいえるだろう。誇張を恐れずいえば，ちょうどロンドンの都市化がオーエンを生み，パリの都市化がフーリエを生んだように，ウィーンの近代化がヘルツカを生んだとすらいえるかもしれない。しかし重要なのはヘルツカという固有名詞では

(38) [4]S. 4.

なく，諸「制度」が無数の，有形無形のヘルツカを生みだしながら，自由で平等で人間は正直で愛に満ち，云々といったネガ像としての理想の価値体系を着実に個人へと波及させていくこと，またその過程で個人はあたかも自らの個を確立したような錯覚にとらわれつつ，あるいはその錯覚に固執しつつ，限りなく無力になっていくということである。ヘルツカの『自由の地』が重要なのは，彼が多大な努力を払って肯定的価値づくめの世界を具体的にえがき，これをアピールしたにも関わらず，またその価値体系は今日でも奇妙に妥当性をもつにも関わらず，同書が今日ほとんど読まれないという事実の中に，誰もがこれを（あえて書こうとはしないが）書こうと決意すれば書けてしまうことを暗示し，しかもそれが書かれなくても変わらないことを暗示しているからである。シュモラーはヘルツカの構想がフーリエの労働観に通じることを指摘し，1830年から1848年頃まではヘルツカのような構想も意義をもっていたが，彼は40年ほど遅すぎたのだと述べている[39]。それは後追い的に進められたウィーンの近代化の下で生まれた構想の悲劇，あるいは運の悪さといえるだろう。彼のテキストの物的 materialistisch な存在理由は，すでに流通していた価値体系の中にのみ込まれてしまったのである。

結　論

19世紀末ウィーンの生みだしたユートピア的経済・社会構想，すなわちブダペスト生まれのユダヤ人テオドール・ヘルツカの手になる『自由の地：ある社会の未来像』（1890年）は，第一に過剰生産を制御すること，第二に人間による人間の搾取を廃棄して，誰もが労働手段を調達できるようにすることを目標とし，東アフリカ赤道付近の地で経済的平等と労働の自由な連帯を実現する人間世界を描いたものである。同書は小説という形態をとることによって広く読まれ，また「自由の地」制度を実現しようとするコミュニティの試みも実際にいくつか行われた。だがこの制度が実現可能な構想であるとする著者の確信に反して，それらの試みは長続きせず挫折した。理論的仮説の平明かつ具体的な叙述という同書の性質が実現への志向性と矛盾すること，ユートピアが自由を目指しながら拘束を必要とすることに，著者は気づいていなかったのである。

とはいえ『自由の地』は，近代化の「制度」の中で個々の主体が示すことのできる態度を典型的に体現している点で興味深い。諸「制度」を批判し，反対像としての理想像を掲げることがもう一つの「制度」となり，掲げた理想像は実は個人の手元にはないという事態に対して，それを自己の問題意識として手中に納めておくために，個人は自己をふさわしい者として「プロデュース」しなければならない。それはヘルツカが典型的に示した，近代の個人の苦闘である。

参考文献

[1] Hertzka, Th., *Freiland : Ein soziales Zukunftsbild*, Zehnte Durchgesehene Auflage, Wien, 1896. (English translation, *Freeland : a Social Anticipation*, London, 1891.)

[2] Hertzka, Th. "Die Verwilderung auf dem Gebiete der

(39) [20] S. 268.

Nationalökonomie", in *Vierteljahrschrift für Volkswirtschaft, Politik und Kulturgeschichte*, Berlin, 1877, 1.

[3] Hertzka, Th. "Ueber Rodbertus' Normalarbeitstag", in *Vierteljahrschrift für Volkswirtschaft, Politik und Kulturgeschichte*, Berlin, 1878, 2.

[4] Hertzka, Th. *Ostafrikanaan : Ein freilandischer Strahl Reflex aus dem Spiegel eines "Klugen"*, Leipzig, 1891.

[5] Hertzka, Th. *Eine Reise nach Freiland*, Leipzig, 1893.

[6] Hertzka, Th. *Entrückt in die Zukunft*, Berlin, 1895.

[7] Cole, G. D. H. (ed.) "The Second International : Chapter XII, Austria", in *A History of Socialist Thought*, Vol. III. Part II, London, 1963.

[8] Eliade, M. "Paradise and Utopia : Mythical Geography and Eschatology" in [15]

[9] Gallagher, J. (and Robinson, R.) "The Imperialism of Free Trade", in *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol. 6–1, 1953.

[10] Hansot, E. *Perfection and Progress*, Cambridge, 1974.

[11] Hertzler, J. O. *The History of Utopian Thought*, London, 1922.

[12] Herzl. Th. *Der Jundenstaat*, 1896. (『ユダヤ人国家』佐藤康彦訳, 法政大学出版局, 1991年)

[13] Johnston, W. *The Austrian Mind : An Intellectual and Social History*, Berkley, 1972. (『ウィーン精神1, 2』井上修一他訳 みすず書房, 1986年)

[14] Macdonagh, "The Anti–Imperialism of Free Trade", in *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol. 14–3, 1962.

[15] Manuel, F. E. (ed.) *Utopias and Utopian Thovght*, Boston, 1966.

[16] Manuel, F. E. *Utopian Thought in the Western World*, Cambridge, 1979.

[17] Menger, C. *Gesammelte Werke*, Band I. Tübingen, 1968.

[18] Platt, D. C. M. "The Imperialism of Free Trade : Some Reservations", in *The Economic History Reuiew*, 2nd Series, Vol. 21–2, 1968.

[19] Schäffer, K. *Die sozialistischen System Theodor Hertzkas und Anton Mengers–mit besonderer Berücksichtigung ihrer Entwicklung aus dem ökonomischen Individualismus*, Halle, 1907.

[20] Schmoller, G. "Theoder Hertzka : Freihändlicher Sozialismus", in *Zur Literaturgeschichte der Staats– und Sozialwissenschaften*, Leipzig, 1888.

[21] Sypher, W. *Literature and Technology : The Alien vision*, New York, 1968. (『文学とテクノロジー』野島秀勝訳 研究社, 1972年)

(博士後期課程第3年度生)